

# TOYON ファミリーによる「ポストコロナ」の学校づくり

～すべての子供たちの育ちと学びを保障する「チーム」の姿とその取組～

仙台市立東四郎丸小学校  
校長 伏見 滋

## I 主題設定の理由

「ポストコロナ期における新たな学びの提言（第12期）」（文部科学省）の「子供の育ちを社会全体で支えるための取組」では、「コロナ禍で子供の心のケアの重要性が改めて注目されおり、子供たちの生活が普段とは大きく変わる中で、学校・家庭・地域が適切に連携し、社会全体で子供の育ちや学びを支えていくことが極めて重要である」と示されている。

令和2年3月から令和5年5月まで、学校は長きに渡って「コロナ禍の生活」を強いられた。

コロナ禍の「副産物」としてオンライン学習の普及等がある一方で、コロナ禍で失われた教育活動によるダメージは計り知れない。また、児童（学校）がコロナ禍でどんなダメージを受け、どのようなケア（取組）が必要かという議論は一般的に乏しいと感じている。

本校は児童数253名、仙台市の南東の端に位置した学校である。児童は全体的に素直で人懐っこく可愛い。一方で様々な配慮を要する家庭環境に置かれている児童の割合が高く、日常的に不安や悩みを抱えて登校してくる児童も多い。コロナ禍後は「人との関わり方」や「自分を表現すること」にいつそう苦手意識を持つ児童が目立つようになるなど、ほぼすべての児童がコロナ禍により何らかのダメージを受けた実態がある。

ポストコロナ期にある今、「コロナ禍によるダメージ」はどのようなものなのかを本校の実態と照らして考察し、すべての子供たちの育ちと学びを保障するための「取組」を講じることが急務あるとの決意のもと、本主題を設定した。コロナ禍が児童の将来に悪影響を及ぼすという強い危機感と、私たち「TOYON ファミリー」の「本気」と「気概」がそこにはある。

## II 基本的な考え方

### (1) 「TOYONファミリー」とは

本校の「チーム学校」による指導体制を表す総称で

ある。「東四（とうよん）ファミリー」と読む。教員はもとより、事務職員、技師等、本校全職員と保護者、地域関係者等が「ファミリー」に含まれる。個別な支援が必要な児童の割合が高い本校においては、児童への指導・支援は、教職員（担任）はもとより「学校」だけで行われるものではなく、子供に関わる「すべての大人」によって保障される体制を整えることが極めて重要である。「TOYON ファミリー」という名称には、「すべての子供たちの育ちと学びを『チーム』で保障する」という精神と学校づくりへの思いが込められている。その名称と精神は、これまでの様々な実践を通して、保護者、地域にも確実に浸透してきている。

### (2) 「コロナ禍によるダメージ」とは

「コロナ禍によるダメージとは何か」ということについて、学校運営協議会をはじめ、校内の会議等、さまざまな場で議論を重ねた。TOYON ファミリーとしての考察は次に示したとおりである。

#### = 「児童」が受けたダメージについての考察 =

- 対話、対面での集会、身体接触が制限され、人との「関わり」を通して得られる学び（感覚）等を十分に獲得できていないという懸念がある。
- 授業、学校行事等にさまざまな制限がかかり、「体験」を通して獲得すべき身体能力、知識、技能、精神力等が十分に身に付いていないという懸念がある。
- 「地域」との交流がほぼ「停止状態」にある。
- 「臨時休業」によって、令和2年6月1日に入学式を迎えた現5年生の児童・保護者は特に大きなダメージを受けていると推測できる。

#### = 「学校」が受けたダメージについての考察 =

- 集会や対面での関わりが制限され、これまで積み重ねてきた「TOYON ファミリー（チーム学校）」としての関係性が希薄化し、保護者、地域、関係機関と学校との信頼関係が脆弱化した。
- さまざまな教育活動が中止となったり、オンライン化されたりしたことで、教育活動全般について「経験



不足」の傾向が見られる教職員の割合が高くなった。特に令和2年度以降採用の若手教職員は人と関わる経験が不足しており、三者協働による学校づくりへの「主体性」の低さも懸念される。

### Ⅲ 「ポストコロナ」の学校づくりにおける二つの「指針」と「重視する取組」

#### 【指針1】

すべての子供たちの育ちと学びを三者協働で  
(TOYON ファミリーで)「本気」で保障する。



#### 【重視する取組】

取組1 - i : TOYON ファミリー全員の「主体性」と  
「思い」を生かした取組

取組1 - ii : 保護者との「信頼関係再構築」の取組

取組1 - iii : 「地域力」を生かす取組

#### 【指針2】

コロナ禍のダメージをケアするために必要な教育活動取組を「気概」をもって実行する。



#### 【重視する取組】

取組2 - i : 「関わり」を重視した取組

取組2 - ii : 「体験活動」を重視した取組

### Ⅳ 取組の内容

「指針」に基づいて重視する取組の内容を紹介する。

#### 【指針1】に基づく重視する取組

【取組1 - i】TOYON ファミリー全員の「主体性」と  
「思い」を生かした取組

学校運営協議会において「コロナ禍のダメージとは何か」「ポストコロナの学校づくりはどうあるべきか」というテーマのもと熟議を重ねた。コロナ禍によるダメージのケアとポストコロナの学校づくりを三者協働で行うことの意義と可能性について議論を深め、「二つの指針」と「重視する取組」を示した。

校内においては、研究全体会、学校運営反省会、学力向上研修会等の場で「ポストコロナの学校づくり」について会議の「進め方」を工夫して議論を重ねた。会議ごとに「ファシリテーター」と「グラフィッカー」を教職員の中から選出し、よりそれぞれの立場の教職員が主体性と創造性を生かして議論できるようにした。また、常に明るい雰囲気的大事にして、若手教職員も

安心して自分の思いを発信できるようにした。

これらの会議で得られた考察や方向性については、学校便りや学校ブログ、各種会議等の場で積極的に発信し、学校、保護者、地域で確実に共有できるようにするなど三者協働で取り組める環境を整えた。

保護者、地域関係者に対して、令和5年12月に「学校経営アンケート」を実施し、ポストコロナの学校づくりについて広く意見を求め、学校経営に反映させるようにした。これまで紙で実施していたアンケートをGoogleフォームでも回答できるように改善し、保護者や地域関係者がより主体的に、手間をかけずに意見を発信できるように工夫した。

校長は「ポストコロナの学校づくり」の指針とプライオリティーについて、あらゆる場面で常に明確に示すよう心掛けた。「コロナ禍前の形に戻す」のではなく、今の子供たちの育ちと学びに何が必要なのかということについて、それぞれの立場から「子供」を主語として創造し、本気で実践してほしいとファミリーに働きかけた。



自由闊達に議論する教職員たち  
「学力向上委員会(7月19日)」

#### 「本気」の取組の具体例(1 - i)

◇令和6年2月14日(水)・6年6月25日(火)

学校運営協議会での熟議。取組のキックオフ!

◇令和6年4月2日(火)4月19日(金)ほか

職員会議、PTA総会等で「指針」を共有!

◇令和6年4月3日(水)・7月19日(金)ほか

研究全体会・学力向上委員会等で教職員が「主体性」「創造性」を発揮し「取組の重点」を吟味!

#### 【指針1 - ii】保護者との「信頼関係再構築」の取組

コロナ禍による、学校行事、PTA活動の制限、家庭訪問、個人面談等の中止は、学校と保護者との関係を脆弱化させた。そこで、保護者との「信頼関係再構築」を目指して主に次のような取組を行った。

第一に「発信・啓発」を強化した。ポストコロナの教育活動について学校便り、保健便り、給食便り、学校ブログ等で詳しく伝えるようにした。年度初めのPTA総会ではポストコロナの学校づくりについて、校長と教頭が直接、保護者へ説明した。

第二に保護者への「寄り添い」を強化した。コロナ



禍で多くの保護者が子育てへの「不安感」を抱いたはずである。保護者の「不安感」を払拭し、学校教育への「安心感」の醸成を目指した取組を行った。毎学期、通信票「所見欄」で一人一人の児童の成長や「その子の良さ」を具体的に記述し保護者へ伝えた。年度始めには「家庭訪問・戸口訪問」を実施し、担任が一軒一軒の家庭を訪問しながら保護者と対面するようにした。夏休みにはすべての保護者を対象に「個人面談」を実施した。また、個別な相談に応じられるよう常時、「教育面談」が実施できる体制を整えた。必要に応じてSC、SSW、関係機関と連携し、面談に同席できるようにした。保護者の声に十分に耳を傾け、保護者の心にしっかり寄り添い、「子育ての悩み」等について保護者が納得いくまで話し合える環境を整えた。

**「本気」の取組の具体例！（柱1 - ii）**

- ◇保護者への継続的な「発信・啓発」
  - ・ 具体の取組と思いが伝わるお便り，学校ブログ！
- ◇保護者の「安心感」醸成に向けた「寄り添い」
  - ・ 毎学期、通信票所見欄で「その子の良さ」を認める！
  - ・ 家庭訪問，面談等，「対面」で保護者と向き合う！

**【指針1 - iii】「地域力」を生かす取組**

本校学区は高い「地域力」を備えている。しかし、コロナ禍で地域との交流は「停止状態」となった。ポストコロナ期にある子供たちの育ちと学びにおいて「地域力」を生かした取組は極めて重要であると考え、次のような取組を行った。

第一に教科の学習や総合的な学習の時間に地域の方を「ゲストティーチャー」としてお招きした。第二に「防災」や「福祉」等の学習において地域の方からの協力をいただいた。また、大人が対象の研修においても「地域力（人材）」を生かすようにした。

**「本気」の取組の具体例！（1 - iii）**

- ◇授業に「地域力」を生かす！（通年）
  - ・ こけし屋さん，豆腐屋さん，落合観音堂ほか（令和6年6月 生活科「まちたんけん」）
  - ・ 社会学級の皆さん（散策美化活動 令和6年5月）
  - ・ 福祉施設職員（福祉の学習）令和6年11月※予定
- ◇大人の研修でも「地域力」を活用する！（通年）
  - ・ 地元ヨガ教室講師（PTA研修 令和6年6月）
  - ・ SBLの皆さん（地域防災訓練 令和6年6月）

**【指針2】に基づく重視する取組**

**【指針2 - i】「関わり」を重視した取組**

コロナ禍で児童は多くの「関わり」の機会を失い、「関わり」を通して得られる学び（感覚）の獲得が不足している事例も散見される。

そこで、学校生活全般にわたって、「関わり」を重視し、次のような取組を行った。

第一は「対面・対話を重視した取組」である。

授業はもとより学校生活すべての場面で対面・対話を重視した。握手をする、円陣を組むといった身体接触を伴う活動も積極的に取り入れるようにした。コロナ禍の期間「テレビ放送」で実施してきた集会活動は「対面（参集）」とした。令和5年3月には宮城教育大学の協力を得て「探究の対話(p4c)」を取り入れた授業実践を3年生の道徳において行った。

第二は「異年齢交流活動を推進」である。異年齢交流活動は本校の特色のある教育活動として数年前から学校経営の柱として実践を重ねている。令和3・4年度仙台市教育委員会認定自主公開校として研究を深めた実績を生かして「東四スタンダード」と呼んでいる本校独自の指導計画を「ポストコロナ」に合わせた内容に発展させた。一人一人の発達段階に応じたコミュニケーションスキルと対話スキルを向上させることに活動の主眼を置き、1・6年，2・5年，3・4年（「きょうだい学年」と呼ぶ）をペアにして活動を展開した。1年生は入学式の翌日から6年生と「ペア」を組み、小学校生活に馴染ませる仕組みを構築した。

第三は「小・中連携活動の活性化」である。

本校では卒業生の多くが仙台市立袋原中学校へ進学することから、袋原中学校との校種を越えた異年齢交流活動を推進した。

「東四塾」と呼ぶ「夏休み勉強会」を7月22日（月）に実施した。中学生が「先生」となって児童に学習のアドバイスを行った。毎月、本校の校門付近で実施している「あいさつ運動」は中学生も参加し、児童に挨拶や声掛けを行っている。陸上記録会の練習には中学生が「指導者」として参加し、児童の陸上競技のアドバイスを行う予定である。

8・9月に数日間実施する計画となって



優しく教えてくれる中学生（東四塾）



いる。コミュニケーションスキルの向上にとどまらず、生徒指導面等においても、小・中学生の双方にとって「win・win」の関係で小・中連携活動が展開されている。

#### 「気概」による実践の具体例！（2 - i）

- ◇「触れ合い」「対話」の場面を十分に確保する！
- ◇異年齢交流活動を基盤とした「人との関わり」！
- ◇「東四塾」等「WIN・WIN」の小・中学校連携！

#### 【指針2 - ii】「体験活動」を重視した取組

コロナ禍によって児童は「体験」を通して獲得する身体能力、知識、技能、精神力を十分に身に付けることができなかつた。そこで、学校生活全般にわたって、「体験活動」を重視し、次のような取組を行った。

第一は「遊びや運動体験」の充実である。子供たちが自由に歓声を上げ、友達と関わり合い、自由に身体を動かすことの楽しさを味わえる場を学校生活全般で保障した。業間時間を長め（30分間）に設定し、教職員も外に出て子供たちと一緒に遊んだ。コロナ禍で中止していた「夏休みプール開放（PTAとの共催事業）」を復活させ、夏休み中も、たっぷり（14日間）泳げる機会を確保した。

第二は「自然体験」の充実である。特別活動等で、自然に触れる機会をできる限り多く設定した。特に5年生の野外活動は2泊3日で実施した。校歌の歌詞にも登場する泉ヶ岳の大自然の中で、火や水、植物や生き物に直接触れるプログラムを実施した。夜はみんなで満点の星空を眺めたり火を囲んで踊ったりした。集団での宿泊体験を通して、仲間との友情も育まれた。

第三は「地域の伝統・文化に触れる体験」の保障である。2年生は生活科の学習で地元の仏堂で宮城県指定有形文化財に指定されている落合観音堂を見学した。東日本大震災の復興を目的に活動している「東中田復興和太鼓」を4年生が継承し、11月の学習発表会で演奏する予定である。コロナ禍で中断していた「和太鼓練習会」を復活させ、希望者が参加している。

#### 「気概」による実践の具体例！（柱2 - ii）

- ◇教職員も一緒に外で遊び、児童と関わる！
- ◇「夏休みプール開放」を再開したっぷり泳ぐ！
- ◇2泊3日の野外活動（5年生）で友情を育む！
- ◇「東中田復興和太鼓」をみんなで継承する！

## V 実践の成果

### 【指針1】について

○コロナ禍以前にも増して学校が活気に満ちた。子供たちの笑顔が眩しい。コロナ禍で受けたダメージのケアが三者協働で進んでいる手ごたえを感じる。

○一人一人の教職員の学校づくりへの参画意識が高まった。教職員が自らの立場から「思い」や「アイデア」を主体的に発信し、「チーム」での学校経営づくりが実現できている。

○校内に「安心感」が醸成された。全学級で落ち着いた雰囲気の中で授業が展開されており、子供たちの表情も全体的に柔らかくなった。

○保護者の中に「安心感」が生まれている。保護者への「発信・啓発」と「寄り添い」の強化が功を奏している実感がある。学校評価アンケートでは学校教育に対して好意的な意見が大半を占めた。コロナ禍に見られた学校へのやや理不尽な要求や苦情が減少した。

○地域力が多くの教育活動で生かされている。市教委はもとより太白区各課、児童相談所、警察等、関係機関職員と「顔の見える関係」が確立された。関係機関の専門性が確実に学校づくりに生かされている。

### 【指針2】について

○児童は「関わり」を通して「人と関わることの喜び」を感じることができるようになった。「人の役に立つことの尊さ」「人を労わることの大切さ」についても学ぶことができた。「相手意識」が身に付いた。

○子供たちは「体験」を通して多くのことを学び、コロナによるダメージは回復傾向にある。「体験活動」を重視した取組は身体能力、知識、技能の習得にとどまらず、優しい心や友情を育むことにつながった。

## VI おわりに ～研究の評価は「子供の姿」～

本研究の評価は「子供の姿」である。それは必ずしも数値化されるものではない。本校全児童の日常の姿と成長の様子が私たちの研究の評価である。ポストコロナの学校づくりの取組は、「子供を主語」として、すべて計画・実施された。「ほかではやっていない」と負の評論をする者は誰もいなかった。コロナ禍という危機をTOYONファミリーは「本気」と「気概」で乗り越え、子供たちを救ったと自負している。今後も私たちは「ファミリーの一員」としてのプライドと使命感を持って、子供たち一人一人を大切に、コロナ禍以前にも増して「安心・安全な学校（子供の居場所）」を作っていくことをここに誓い結びとしたい。